

《史料研究》

家永三郎・黒羽清隆『史料を中心とした中学生の歴史』
（1959年）の検討
— 十五年戦争期を中心に —

八 耳 文 之

はじめに

十五年戦争史の研究で知られる黒羽清隆(1934～1987年)は、東京教育大学文学部卒業後、東京都新宿区立東戸山中学校に赴任し、教師生活をスタートさせた¹。黒羽は東戸山中学校に勤務していた1959年（教師4年目、25歳）に「戦争史の学習をどうすすめるか²」を執筆した。この「戦争史の学習をどうすすめるか」は、黒羽を「意を尽くして³」論じた鹿野政直の「『民衆』史と『庶民』史を架橋する⁴」では、黒羽の仕事の中で重要な意義があたえられている。歴史教育からも、この「戦争史の学習をどうすすめるか」を、古谷博が著書で1頁半にわたって言及した⁵。ただ「戦争史の学習をどうすすめるか」では、授業で使った史料が「簡単な中身」について「走り書き⁶」されているだけで、黒羽が同じ年に著した『史料を中心とした中学生の歴史⁷』を参照しなければ、史料の詳細はわからない。

この『史料を中心とした中学生の歴史』は、「はしがき」のみ家永が執筆し、本文はすべて家永の指導のもとに黒羽が執筆した⁸。『史料を中心とした中学生の歴史』は、中学生向けの参考書として刊行され、『中学生の歴史』と改題した新装版が1971年に

¹ 加藤正彦・八耳文之編『黒羽清隆歴史教育論集—子どもとともに歴史を学び、歴史をつくる—』竹林館、2010年、参照。

² 黒羽清隆「戦争史の学習をどうすすめるか」『歴史地理教育』49号、1960年2月（のち黒羽清隆『日本史教育の理論と方法』地歴社、1972年所収）。

³ 田村貞雄「黒羽文庫について」（『静岡大学所蔵 黒羽文庫目録』静岡大学図書館、1990年）

⁴ 鹿野政直『鹿野政直思想史論集』第7巻、岩波書店、2008年（初出1988年）。

⁵ 古谷博『十五年戦争学習の実践と総括』ルック、1994年。

⁶ 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、8～9頁。

⁷ 家永三郎・黒羽清隆『史料を中心とした中学生の歴史』学生社、1959年。国会図書館に所蔵されているが、現在、デジタル化され、多くの図書館で閲覧できる。

⁸ 出版されるまでの経緯について、黒羽が語っている（前掲『黒羽清隆歴史教育論集』所収CD参照）。

出版された⁹。この『史料を中心とした中学生の歴史』（以下、『中学生の歴史』と表記する）は、現代文に書き直された史料を中心に、日本の歴史が「くわしく、しかもやさしく書かれている¹⁰」こともあって、広く読まれた。

『中学生の歴史』（索引も含め 290 頁）は、「歴史の動き¹¹」・史料・解説からなり、巻末には「史料問題の考えかた・答えかた」（268～278 頁）がつく。「第 5 章 近代日本の成立と発展 第 4 節 昭和史」は、「1 昭和恐慌 2 大陸侵略へのみち 3 世界の孤児ニッポン 4 軍国主義の世界 5 日中戦争 6 太平洋戦争 7 生まれかわる祖国 8 未来をきづく世界史」（230～267 頁）と、なっている。

黒羽は大学では日本近代史を専攻し、卒業論文は明治社会主義思想史をテーマにした¹²。十五年戦争の専門的研究にふみだすのは、1970 年代に入ってからである¹³。これまでの黒羽清隆論では、この『中学生の歴史』にはほとんどふれられることがなかった¹⁴。本稿は、『中学生の歴史』が満州事変・日中戦争・太平洋戦争（十五年戦争）について、どのような史料をとりあげ、どのように記述しているかを検討することによって、東戸山中学教師時代の黒羽の戦争論に接近する。この『中学生の歴史』が刊行された 1959 年は、はじめて戦後生まれが歴史を学ぶ中学 2 年生になった年である。戦争体験のない中学生に「生きた歴史」を実感させるために、授業で使用した史料プリントをもとに『中学生の歴史』は「試作」された¹⁵。『中学生の歴史』が 1950 年代の作品¹⁶であることを意識して、『昭和史』（岩波書店）¹⁷、加藤文三「近・現代史の学習」、加藤・吉村徳蔵「講座・歴史教育の資料と扱い方」¹⁸と比較して、その特質

⁹ 黒羽清隆『増補版 日本史教育の理論と方法』地歴社、1975 年、199 頁（『日本史教育の理論と方法』は、増補版を参照した）。

¹⁰ 引用は新装版のカバーの宣伝文。なお筆者は、『中学生の歴史』昭和 48 年度版を所蔵している。

¹¹ 家永の「はしがき」による表現を用いた。この「歴史の動き」は教科書の本文にあたる。

¹² 黒羽・前掲『増補版 日本史教育の理論と方法』201 頁。「友よ、滅びた大学への挽歌として」『歴史教育と教科書問題』地歴社、1982 年（初出 1981 年）。

¹³ 黒羽清隆「十五年戦争における戦死の諸相」『思想』566 号、1971 年 8 月（のち『十五年戦争史序説』三省堂、1979 年所収）。

¹⁴ 大江一道「回想・黒羽清隆とその歴史教育論」『歴史地理教育』422 号、1988 年 1 月で「資料を活用した好著」と、言及されている。

¹⁵ 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、8 頁。

¹⁶ 大門正克編著『昭和史論争を問う』（日本経済評論社、2006 年）は、1950 年代のなかに昭和史論争を位置づける視点を重視している。

¹⁷ 遠山茂樹・今井清一・藤原彰『昭和史（新版）』岩波書店（岩波新書）、1959 年。1955 年の旧版は、昭和史論争をひきおこしたが、ここでは新版を参照する。

¹⁸ 加藤文三「近・現代史の学習」は『歴史地理教育』38 号（1958 年 11 月）から 40 号（1959 年 2 月）まで連載され、「講座・歴史教育の資料と扱い方」は、加藤と吉村徳蔵が執筆し、「ファシズムと戦争」については、『歴史地理教育』49 号（1960 年 2 月）に掲載された。いずれも、のちに『歴史教育

をうきぼりにしたい。

1. 満州事変について

満州事変については、「2 大陸侵略へのみち」の「歴史の動き」で、「中国・満州をねらうもの」「中国民衆のたたかい」につづく、「満州事変」の見出しで記述する(236頁)。

史料は、「9月18日夜の事件を知らせる1931年9月19日づけ『大阪朝日新聞』号外」で、「15年戦争への第一発」と題されている(237頁)。

まず注目すべきは、「15年戦争」という歴史用語を使っていることである。「15年戦争」は、満州事変から始まる敗戦までのあしかけ15年にわたる戦争をさすが、1956年に鶴見俊輔が提言¹⁹してまもない時期であり、『昭和史〔新版〕』にもでてこない。加藤文三らも使っていない。歴史教育の現場で、「15年戦争」を初めて使用したのは、黒羽ではないだろうか。黒羽は「戦争史の学習をどうすすめるか」でも、「日中・太平洋戦争史、いわゆる十五年戦争史」と記している²⁰。ちなみに歴史教育者協議会の大会報告で、「十五年戦争」を初めて表題に使ったのは、1973年の愛媛大会での黒羽の報告であった²¹。

9月18日の夜の事件(柳条湖事件)を伝える新聞記事などによって、加害者＝中国軍、被害者＝日本軍という真実とは180度異なるイメージが刷り込まれ、民衆は戦争に引きずり込まれていく。その意味では、非常に重要な史料である。すでにこの事件の実行犯の手記が発表されていた²²が、教科書には、まだ「奉天郊外で、わが南満州鉄道が中国軍隊によって爆破されたといわれる事件をきっかけにして、日本軍はただちに出動し、全満州を占領した²³」との記述にとどまっていた。黒羽は断言はしなか

の資料と扱い方』(加藤文三・鈴木亮・吉村徳蔵、地歴社、1965年)に所収された。ここでは、黒羽も参加した『増補 歴史教育の資料と扱い方』(加藤文三・鈴木亮・吉村徳蔵・黒羽清隆・槐一男、地歴社、1975年)を参照した。

¹⁹ 鶴見俊輔「知識人の戦争責任」『中央公論』71巻1号、1956年1月。鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』岩波書店、1982年、参照。

²⁰ 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、7頁。

²¹ 古谷・前掲『十五年戦争学習の実践と総括』11頁。

²² 花谷正「満州事変はこうして計画された」『別冊知性』1956年12月号。

²³ どの教科書を使用していたかは不明だが、ここでは黒羽の師の家永や小西四郎が著者の小西四郎・家永三郎『中学社会 改訂版—歴史的内容を主とするもの—』(三省堂、1956年検定本)から引用する(258～259頁)。以下、断らない限り、教科書といえばこの三省堂の教科書をさす。

ったものの、「日本軍の侵略戦争だとみる方が」「真実に合っているようである」とした(238 頁)。

「満州国」については、「ニセの独立国」「日本の植民地にひとしい」と断じ、宣伝された「王道楽土」とは裏腹に、「高級官吏は日本人が任命され」「鉄道・警察・軍隊」は日本に任された(236 頁)、と実態を具体的に記述している。「完全なカライ国家」(『昭和史〔新版〕』、85 頁)を、『中学生の歴史』は中学生向けにわかりやすく表現した。

2. 日中戦争について

日中戦争期は、「日中戦争図」「夜と城とある日本兵の死」「ひとつの秘密の兵器」「たたかいの歌」、そして「あれもサヨナラ、これもサヨナラ」と題する史料が掲載されている。「日中戦争図」は、日本軍の占領地域を載せるが、「1938 年後に日本の占領地域がひろがっていないことを示す」とのキャプションがつく(243 頁)。

まず「日中戦争」という用語を使っていることに注意したい。教科書では、「はてしない中国との戦争」という見出しだが、本文では「日華事変」が使われている²⁴。加藤文三の「近・現代史の学習」でも、「中国との戦争 その2 日華事変」と、「日華事変」が使われていたが²⁵、「講座・歴史教育の資料と扱い方」では、「日中戦争」にかわっている²⁶。

南京大虐殺について、「日本軍はあせり、ほとんど強盗にひとしい野蛮な行動に出て、南京の大虐殺を始め、多くの中国民衆を殺した」(242 頁)と、非常に激しい表現で記述した。加藤文三は「近・現代史の学習」で、三笠宮崇仁著『帝王と墓と民衆』(光文社、1956 年)などをプリントに載せ、南京大虐殺を教えている²⁷。なお、この時期には、「南京に入城した軍が市民にひどい暴行を加えた」と記述する教科書もあった²⁸。

「歴史の動き」では、〔中国民族の抵抗〕の見出しのもとに、抗日救国民族統一戦

²⁴ 小西四郎・家永三郎・前掲『中学社会 改訂版—歴史的内容を主とするもの—』、262 頁。

²⁵ 加藤文三「近・現代史の学習(2)」『歴史地理教育』39 号、1959 年1 月、88 頁。

²⁶ 加藤・吉村徳蔵「講座・歴史教育の資料と扱い方 9・ファシズムと戦争」『歴史地理教育』49 号、1960 年2 月、36～37 頁。

²⁷ 加藤・前掲「近・現代史の学習(2)」、89 頁。

²⁸ 務台理作監修『中学社会 歴史的内容を主とするもの』開隆堂、1956 年検定本、253～254 頁。

線の結成にふれ、それが日本軍のあせりをまねいたことを、明確に指摘した(242 頁)。そして史料「ひとつの秘密の兵器」では、中共軍司令官朱徳の伝記であるアグネス＝スメドレー著『偉大なる道²⁹』から、中国民族の抵抗の具体的展開が描かれている箇所が引用される(244～245 頁)。ここでの「敵」とは日本軍のことである。「敵」国側の史料を読むことが、戦争史の正しい理解にとって不可欠であり、戦争に関する「ナショナル・センチメンタリズム」脱却のためにも強く要請されると主張した³⁰。「人民英雄」の少年を紹介しているのは、学んでいる中学生と同世代の中国の少年も日本の侵略と戦っていたことを意識させるためと思われる。「ひとつの秘密の兵器」とは、朱徳の言葉である。

史料「夜と城とある兵士の死」は、火野葦平が執筆した小説『麦と兵隊』(1938 年)³¹から鉄兜に二つ穴をあけられて死んでゆく兵士を描写した部分である(243～244 頁)。ここでは、「戦争が、なによりもまず、ひとりひとりの人間の悲惨な「死」であることが」、「戦争史の第一主題として」示される³²。注目されるのは、『麦と兵隊』から史料がとられていることである³³。この『麦と兵隊』が、ベストセラーになったのは、「えがきだされた戦場風景や兵士の生態が、出征兵士の安否をきづかう銃後国民の気持をとらえたからであった」(『昭和史〔新版〕』、165 頁)が、軍部の戦争宣伝に奉仕させられたことにより、火野葦平は公職追放されている。そのことで、敗戦後、『麦と兵隊』は「触れるだけにけがらわしいものと感じられていた」(開高健)³⁴。その『麦と兵隊』を「戦争史の第一主題」を示す史料として使い、さらに、『偉大なる道』『渡辺直己歌集』とあわせてだが、「戦争の記録としてすぐれたもの」「戦争にいきる人間のほんとうの姿が見事にとらえられている」とまで、評価した(246 頁)。

史料「たたかいの歌」は、華北で戦死したアララギ派の歌人渡辺直己陸軍中尉の歌集『渡辺直己歌集』から中国兵を歌った「戦争吟」をひいている(245 頁)。このような史料は、「民族感情」をのりこえて敵国兵を「人間」として見る視点をつくりだす

²⁹ アグネス＝スメドレー著(阿部知二訳)『偉大なる道』岩波書店、1955 年(1977 年、岩波文庫)。

³⁰ 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、9～10 頁。

³¹ 火野葦平『麦と兵隊』新潮社(新潮文庫)、1953 年。

³² 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、9 頁。

³³ 黒羽はのちに『日中 15 年戦争』(中)教育社(教育社歴史新書)、1978 年で、「『麦と兵隊』ノート」(144～160 頁)を書いている。

³⁴ 黒羽・前掲『日中 15 年戦争』(中)、153 頁。

のにどうしても必要と主張した³⁵。『渡辺直己歌集』については、黒羽は、中野重治を通して、知ったようである³⁶。とりあげられた渡辺直己の歌は、黒羽がつけた注釈を参照すれば、中学生も理解できる、この歌を通じ、日中戦争の戦闘の実態にせまれる。

日中戦争は、兵士が戦場で戦うだけでなく、「銃後」の国民生活にも大きな影響をもたらした。「あれもサヨナラ、これもサヨナラ」と題する新聞の見出し集は、短いながら、強いインパクトを与える史料である。さらに解説で、戦争によって、国民生活が悪化したことが、具体的に示されている。特に「ぜいたくは敵だ」の標語に関わるエピソード（ポスターに「ぜいたくは素敵だ」との落書きがされた³⁷）は、興味深い（246～247 頁）。なお、加藤文三・吉村徳蔵の「講座・歴史教育の資料と扱い方」では、「国家総動員」の資料は示されず、のちに『増補 歴史教育の資料と扱い方』で、黒羽がこの項目を執筆し、新聞の見出しを史料として載せている³⁸。「歴史の動き」の〔失われゆく自由〕では、「徴用令書」によって強制労働にかりたてられ、政府・軍部に反対する者は「死」か「牢獄」が待っていたと、日中戦争の開始によって、国民は戦争を批判することは一切許されず、協力せざるをえなくなったことが明記されている（242 頁）。

3. 太平洋戦争について

太平洋戦争期は、「戦争前夜」「ほしがりません勝つまでは」「暗い谷間の記録」「海底 430m」「原爆で死んだ女学生達にささげる詩」そして「日本よ降伏せよ」と題する史料が掲載されている。

ここで注目されるのは、天皇（昭和天皇）と戦争との関わりが記述されていることである。「歴史の動き」で、終戦時の、天皇が「降伏を決意」、「天皇自身のラジオを通じての『終戦』の」放送だけでなく（249 頁）、東条英機内閣が「戦争を決意、天皇もこれを許した」と、開戦時も明記している（248 頁）。さらに「解説」では、具体的に天皇出席の御前会議で開戦が決定されたことが記述されている（251 頁）。加藤文

³⁵ 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、9 頁。

³⁶ 芳賀登・黒羽清隆『日本史百三十一話』雄山閣、1963 年、346 頁。

³⁷ 安藤鶴夫「江戸庶民の笑」『文学』21 巻 8 号、1953 年 8 月、岩波書店。

³⁸ 「日中戦争（その二）―戦争と国民生活（「国家総動員」体制）」、前掲『増補 歴史教育の資料と扱い方』、260～261 頁。

三の「近・現代史の学習」、加藤・吉村徳蔵の「講座・歴史教育の資料と扱い方」には開戦時の天皇の記述はない。『昭和史〔新版〕』にも天皇が開戦に関わったことがはっきりとは書かれていない³⁹。現在も、中学の教科書には、天皇が開戦に関わった記述はない。

また、「歴史の動き」(248～250 頁)は、軍歌やラジオの臨時ニュースを引用する臨場感あふれる記述で、時代の雰囲気がよく分かる。「死んでいった数百万のひとつとはもう帰ってこない」との最後の文も胸を打つ。ただ、アメリカが「フィリピン・沖縄・サイパン」を攻撃・占領したと、沖縄がフィリピン・サイパンと並記されているのは、適切ではない(沖縄が、フィリピンとサイパンの間にあるのはミスか)。

史料「戦争前夜—1941 年 12 月 4 日枢密院本会議にて—」(250 頁)の出典は、枢密院顧問官であった深井英五が著した『枢密院重要議事覚書⁴⁰』である。枢密院会議のくわしい記録で、太平洋戦争前後の日本指導者の発言がわかる一次文献である。この史料は、「指導者(エリート)」の位置と役割とを考えさせるためと、「資源体制の構造」についての地理的単位と関連づけて学習させるために選ばれた⁴¹。「解説」で「いかげんな指導者」が「甘い」見通しのもとに、国民を「戦争へひきずりこ」んだと、厳しく批判している(251 頁)。

この「解説」と同じ頁に、図版「占領地域図」が掲載され、大東亜共栄圏も図示されている。このキャプションで、「大東亜共栄圏」は、「アジア民族が同じ仲間として共に栄えてゆく地域という意味であるが、事実上、日本の植民地支配の地域をしめすものであった」と、的確にその実態が記される。

史料「ほしがりません勝つまでは」(252 頁)は、東京の国立療養所清瀬病院で病とたたかっていた人たちがつくった『私達は忘れない 一学童疎開を中心にした子供の戦争体験記一』という学童疎開の記録からとられている。この史料では、空腹に苦しみながら厳しい労働(遠距離を歩かせられ、重い薪運び)を強いられる場面と、雪の中で教師に往復ビンタされる場面が引用されている。

黒羽は「疎开学童派ともいべき世代」と自認し、学童疎開体験にこだわった⁴²。

³⁹ 「天皇も木戸も次第に開戦論に反対しなくなっていた」と記述するのみである(『昭和史〔新版〕』、202 頁)。

⁴⁰ 深井英五『枢密院重要議事覚書』岩波書店、1953 年。

⁴¹ 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、10 頁。

⁴² 黒羽清隆『日本史への招待』大和出版、1974 年。黒羽清隆『太平洋戦争の歴史』講談社(講談社学術文庫)、2004 年(初版 1985 年)。

「解説」で、以下のように述べる。黒羽の想いがこもった文なので、長くなるが引用する(253 頁)。

(前略) 一日中空腹で、お手玉にイリ豆をいれて送ってもらってこっそり食べるとか、ハミガキ粉を食べるとかいう習慣が生まれたりした。苦しみを訴える手紙は調べられて都合の悪い所は消され、なかには母恋しさに脱走する者さえいた。このような児童は 31 万 4 千名にのぼり、その多くは敗戦後家に帰った時に父母兄弟が爆撃で死んでいたことに気づかねばならなかった。(中略) また、中学生は勤労働員といって学校から工場にかり出され、その健康を傷つけるまでに兵器生産をつづけさせられた。勉強とかスポーツとか旅行とかはかれらからうばわれていた。そして、大学生は学徒動員といってペンをすて銃をとり、未来に富む青春の命を山に海に密林にすてていった。「ほしがりません勝つまでは」とは当時の標語だが、青少年たちの若い生活もまたひどい形で犠牲にされたのであった。「ほしがりません勝つまでは」——しかし、親と一緒に暮らしたいとのぞむことは国にそむくことだろうか。ひもじくない程度にでもせめて食べたいとねがうことは良くないのだろうか。学問・勉強をもっとしたいと考えることは罪なのだろうか。しかも、それらの願い・希望は無視されつづけたのであった。そして、教えられつづけてきたのであった。——「ほしがりません勝つまでは」

「ほしがりません勝つまでは」のフレーズの繰り返しのによって、黒羽の怒りが伝わってくる。若者・子どもに犠牲を強いた戦争・当時の大人(教師も)を、自らの体験をふまえて、厳しく告発している。

史料「暗い谷間の記録」(253～254 頁)は、外交評論家の清沢洌の『暗黒日記⁴³』と小説家の広津和郎の『作家の日記』である。「ラジオは」「終始、感情的叫喚」「米国は鬼畜、英国は悪魔だといった放送」「かくも感情にうったえなければ戦争は完遂できぬか」(『暗黒日記』)、「人間の命を何故無意味にかく軽く扱うのか。驚くべきである。この人間の命というものについて考え直さなければ、日本は世界に出て行っても発展するはずなし」(『作家の日記』)など、戦争をするどく批判した箇所が引用される。

「解説」で、「気狂いじみた戦争の時期に良心のきらめきをうしなわなかったひと

⁴³ 清沢洌『暗黒日記』東洋経済新報社、1954 年(1990 年、岩波文庫)。

たちの日記」と、最大級の言葉で戦争を非難するとともに、「非人間的なメカニズム」にまきこまれなかった人たちがいた⁴⁴ことを明記している(254～255 頁)。なお、家永三郎も、高校日本史教科書に『暗黒日記』の史料を掲載しているが、黒羽とは別の箇所である⁴⁵。

史料「海底 430m」(255～256 頁)の出典は、戦艦大和の乗組員だった吉田満の記録小説『戦艦大和ノ最期⁴⁶』である。直撃弾が命中し、「若武者、ヒトカケラノ肉、一滴ノ血ヲモ残サズ。ソノ肉体ハ空中ニ飛ビ散ッタ」というシーンから、「大閃光ヲフキ、火ノ巨柱ヲ暗天深く突キアゲ全艦ノ細片スベテ舞イ散ル」「火柱ノ頂ハ実ニ 6000 mニ達スル。閃光ハ鹿児島カラ望見デキタトイウ」轟沈までが引用されている。

「解説」(256～257 頁)で、「戦艦『大和』は片道だけの燃料をつんで沖縄本島に向かい、途中アメリカ空軍の猛爆撃にあい奄美本島の西方に沈められた」と記述する。また、「世界ノ3馬鹿、無用ノ長物ノ見本 — 万里ノ長城・ピラミッド・大和」が、海軍軍人の「仮纏帯所にて」間でいわれていたというエピソードも紹介されている。沖縄戦については、前述の「歴史の動き」と、「解説」では、「4 月にはアメリカ軍が沖縄本島に上陸した」との記述にとどまる。なお、加藤文三は、「近・現代史の学習」の「中国との戦争 その2 日華事変」で、戦艦大和を中学校校舎と比べた図を載せている⁴⁷。

史料「原爆で死んだ女学生達にささげる詩(257～258 頁)」は、広島で被爆した峠三吉の「仮纏帯所にて」という題の詩で、『原爆詩集』に収録されている⁴⁸。加藤文三も「近・現代史の学習」で紹介しているように、「仮纏帯所にて」を授業で読んだ⁴⁹。「仮纏帯所にて」が、黒羽の授業の中で最も印象に残ったと、1959 年 3 月東戸山中学卒業生(女性)は述べている⁵⁰。原爆については、図版でも、丸木位里・俊子『原爆

⁴⁴ 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、10 頁。

⁴⁵ 家永三郎『検定不合格日本史』三一書房、1974 年。この書は、1956 年に文部省に検定申請し、翌年に不合格処分を受けた原稿の全体を、写真複製したものである。

⁴⁶ 吉田満『戦艦大和の最期』創元社、1952 年(1994 年、講談社文芸文庫)。発表当時、「戦争肯定の文学である」と批判されたようだ(竹内久顕編著『平和教育を問い直す』法律文化社、2011 年、97 頁)。

⁴⁷ 加藤・前掲「近・現代史の学習(2)」、88 頁。

⁴⁸ 峠三吉『原爆詩集』青木書店(青木文庫)、1952 年。

⁴⁹ 加藤文三「近・現代史の学習(3)」『歴史地理教育』40 号、1959 年 2 月、23 頁。

⁵⁰ 田中雅子「黒羽先生の思い出」『クリオ』7 号、1988 年。なお『クリオ』はクリオの会(黒羽が講師をつとめた東京都成人学校の受講生がつくった歴史サークル)の機関誌である(『増補版 日本史教育の理論と方法』453 頁参照)。

の図』より「悲しき広島之母」が掲載され、キャプションで「乳をのませようとしてはじめて、わが子のことを知っているのを知った母 — それは痛ましき 20 世紀の母子像である」と記述する(249 頁)。

「解説」でも、以下のように述べる(258～259 頁)。

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分ころ、アメリカの B29 爆撃機は広島市に世界歴史初めての原子爆弾を投下した。爆弾は高度 1500m 付近でマグネシウムの爆発の青白い光をきらめかせ、570m の高さで強烈に核爆発した。爆発中心地は 1 万 1 千度の熱を持つ火の球、小さな太陽ともいふべきものによって熱せられた。

全市はたちまち炎と爆風と熱い光線によって破壊され、中心では瞬間に人間がとけてしまい、すこしはなれたところでも皮膚がむけてたれさがりむき出しにされた肉にガラスの破片が細かくつきささり、苦痛にうめくひとは声なき行列となって川や泉に殺到しておぼれ死に、さながらの地獄となった。死者は約 30 万。つづいて 9 日、長崎市にも投下されて同じ光と熱との地獄をつくった。政府・軍部は被害をいつわり事実を隠そうとした。

アメリカは、日本政府に降伏の決意をさせるためにこの爆弾を投下させたのだが、8 月 8 日にはソ同盟の戦争参加が予定されており、『アメリカが日本を降伏させたのだ』という事実をはっきりさせるために 8 月 6 日の時期をきめたことが知られている。

「原子爆弾についてはその「力」についての数量的統計をはっきりつかんで、「原爆文学」読みに入るべき」との主張通り⁵¹、具体的数字が明示されるとともに、被害について、読み手に被爆者の苦しみ・痛みが伝わる生々しい記述である。原爆投下の目的は、「アメリカが日本を降伏させた」ことを示すためだ、と断じている。

空襲については、「歴史の動き」で「アメリカ空軍は、日本本土に爆撃を加え重工業地帯を完全に破壊した」と記述し、図版「東京の 1945 年」(写真)を載せ、「見るかげもない日本の首都。B29 の爆撃はこんな東京をつくってしまった(後略)」とのキャプションをつけている(249 頁)。

「6 太平洋戦争」のおわりに、三つの戦争についての統計表(兵隊のみの死傷者合計・軍事費)を載せる(259 頁)。いずれも、日清戦争・日露戦争に比べて太平洋戦

⁵¹ 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、11 頁。

争が飛躍的に増加していることが示されている。

史料「日本よ降伏せよ」(262～263 頁)は、日本に対する無条件降伏を要求した米・英・中国の名において発表されたポツダム宣言である。「戦争の終り方がすなわち戦後史の始まり方になるという扱い方」から⁵²、「6 太平洋戦争」ではなく「7 生まれかわる祖国」に、位置づけられている。

「解説」(264 頁)で、1945 年 8 月 9 日の「御前会議では、宣言受諾を主張する東郷外務大臣案とあくまで本土決戦を主張する阿南陸軍大臣とが対立し、けっきょく天皇の発言によって外相案がとられることとなった」と、天皇によって宣言受諾が決まったことが具体的に記述されている。「敗戦後、このポツダム宣言こそ、戦後の日本をみちびくもっとも基本的な理想とされたのであった。(中略)ポツダム宣言は、軍国主義にたいする民主主義の勝利の記念として記憶されるべきだろう」と、歴史的意義が記される。

巻末の「史料問題の考えかた・答えかた」の最後の問題は、1945 年 8 月 9 日の日本政府指導者の会議の記録をとりあげる(277 頁)。「ポツダム宣言を受けいれて降伏する」ことによる戦争終結を提案した東郷外相に反対する阿南陸軍大臣の発言について、感想を述べよ(2 百字以上 3 百字以内)という問題である。「陸軍大臣の発言と、その頃の日本がどんな状態にあったかを考え合わせて、君がもしこの重要な会議に出席していたらどう思うかと想像してみてペンをはしらせてみよ」というヒントをだしている。この史料問題の出典は、外務省編『終戦史録⁵³』である。〔解答〕では、陸軍大臣の「無責任」ぶりを繰り返し指摘している(278 頁)。

おわりに

黒羽の『中学生の歴史』は、独力でなったのではない。家永が、「はしがき」で記すように、同僚の寺沢正巳⁵⁴らから援助をうけた。黒羽は新任時に寺沢と連名で「近代および現代史」学習計画案」を発表している⁵⁵。その学習計画案によると、太平洋

⁵² 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、11 頁。

⁵³ 外務省編『終戦史録』新聞月鑑社、1952 年。

⁵⁴ 寺沢正巳は、社会科主任、地理専攻。のち東京学芸大学附属高校で再び同僚となる(黒羽清隆『日中戦争前史』三省堂、1983 年、84 頁参照)。

⁵⁵ 『教育』71 号、1957 年 4 月。東戸山中学は、1956 年度の東京都社会科(歴史教育)研究協力校に指定され、新任の黒羽は、寺沢らとともに、カリキュラム・学習指導案の作成、研究授業を行い、鍛えられた。この『教育』には、黒羽の研究授業「秩父困民党物語」の記録が掲載されている。

戦争では、開戦の御前会議速記録を、敗戦では、ポツダム宣言をプリントにしている。

『中学生の歴史』には、開戦の御前会議速記録は使われず、ポツダム宣言は使われた。満州事変や日中戦争では、地図などをプリントにしているが、史料については明示されていない。『中学生の歴史』は、前述したように、家永の指導を受けている。当時の、家永は戦争史の専門家ではない。家永の高校日本史教科書の史料とも重ならない。十五年戦争期の史料の選択は、家永のアドバイスによるのではなく、黒羽が自分の考えにもとづいて行った、と思われる。

黒羽は、「戦争史学習をどうすすめるか」で、「戦争史とりあつかいに関しては三つの視点がある⁵⁶」とした。その三つの視点とは、「日常生活の危機として（出征・飢え・戦災・疎開・動員）」「戦闘そのものとして（軍事技術史の見通しに立ちつつ）」「政治的・経済的「事件」として（国家間の対立・経済構造・植民地問題）」である。「この三つの視点が教材撰択の順次性研究の土台となる」、すなわち史料に関してもこの視点から当然選ばれている。ユニークなのは、「戦闘そのものとして」の視点から選ばれた『麦と兵隊』『渡辺直己歌集』『偉大なる道』『戦艦大和の最期』からとられた史料である。また、「日常生活の危機として」の視点から選ばれた学童疎開の史料は、「疎開派世代」の黒羽の想いがこもっている。

『中学生の歴史』と加藤文三・吉村徳蔵の「講座・歴史教育の資料と扱い方」とでは、とりあげている史料がほとんど異なる（戦争の死傷者数・軍事費の表の一部は同一）。加藤の「近・現代史の学習」とでも、峠三吉の「仮繃帯所にて」のみが同じである。黒羽は、新任時に、「仮繃帯所にて」を教えたかは不明だが、前述のように2年目の1957年度にはこの詩を教えている。加藤の実践が発表されたのは、1959年だから、加藤の影響はない。

『中学生の歴史』には、『昭和史』を出典とする史料はない。地図などの図版は、歴史学研究会編『太平洋戦争史』（東洋経済新報社、1953～1954年）などを参考にしているが、史料は、基本的には直接文献にあたっている。『枢密院重要議事覚書』『終戦史録』など、「基本的記録」も含まれる。のちに黒羽は『日本史教育の理論と方法』で、「太平洋戦争史の必読文献（むろん教材構成用の必修的文献）」の「基本的記録」として『西園寺公と政局』（原田熊雄述、岩波書店、全9冊、1950～1956年）と『木戸幸一日記』（東京大学出版会、全2冊、1966年）をあげている⁵⁷。

⁵⁶ 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、7～8頁。

⁵⁷ 黒羽・前掲『増補版 日本史教育の理論と方法』、199頁。

黒羽が十五年戦争の研究者としてふみだした 1971 年の論文「十五年戦争における戦死の諸相」は、戦場の死や渡辺直己の歌をとりあげた「戦争史の学習をどうすすめるか」や『中学生の歴史』の問題意識が持続して、結実したものである。また、「ひとつの秘密の兵器」ででてくる中国の少年のたたかいは、黒羽の遺作となった「子どもたちのたたかい⁵⁸」まで、繰り返しとりあげられた。黒羽の、歴史を学ぶ中高生と同世代の子どもの歴史や中国民族の抵抗を、重視する姿勢は一貫していた。

「史料プリント」は、「戦争体験「採集」と教科書・板書との中間に架橋するもの⁵⁹」と黒羽は位置づけたが、この『中学生の歴史』の読者は、抽象的、無味乾燥な教科書とはちがい、黒羽の熱情的な筆致により多様な史料をもとに「生きた」戦争史を実感できた、と思われる。黒羽は、『中学生の歴史』につづいて、家永との共著で『新講日本史』（1967 年）⁶⁰を刊行した。機会があれば、『新講日本史』の戦争記述についても検討してみたい。

⁵⁸ 「子どもたちのたたかい ―授業プランへの原初的アプローチ―」『歴史地理教育』414 号、1987 年 7 月（のち『黒羽清隆歴史教育論集』所収）。

⁵⁹ 黒羽・前掲「戦争史の学習をどうすすめるか」、8 頁。

⁶⁰ 家永三郎・黒羽清隆『新講日本史』三省堂、1967 年。